

E-8 子どもの住空間把握に関する研究(予報)

愛知教育大 O野田満智子 渡辺みよ子

目的 子どもにとって、自分の住んでいる家がどのような意味をもっているのか、また、家のどのような点に関心がむけられているのかを明らかにすることによって、1.子どもの健全な成長を助長する住居の条件、2.家庭科教育の教科内容の精選とその系統化、という二点を究明する足がかりとする。

方法 本調査の調査用紙作成のため今回は対象を小学校五、六年生に限定して、次のような内容について、調査を行なった。

- ① 調査用紙を配布し、わが家の平面図を画かせる。
- ② わら半紙を配布し、家(いえ)について自由記述させる。
- ③ 調査用紙(住居や家族の状態、平面図)を持ち帰らせる。——自宅にて親が記入

結果 ①子どもの画いた家の平面図をもとに、家の規模と空間把握の正確さ(家の輪かく、室の連結の仕方)との関係を見ると、3室以下、4~8室、9室以上の3グループ間に明らかな差がみられる。すなわち、規模が大きくなるほど、誤謬が増す。

②子どもの自由記述したものを様式によってまとめると、住要求式、住機能式、現状記述式、連想式の4種に大別できる。さらにこの中でもっとも多い住要求式について、KJ法による分類を行なったところ、家の広さ、自分の使用空間、庭、住まい方、家の形 等10種になった。

③調査対象児の家族人数は4人がもっとも多く全体の49%にあたり、住居の規模は、建築面積、敷地面積ともに、わが国の平均以上のものが多い。